

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会会報

1997年 3月20日 発行

15 ドイツ大使歓迎
十回記念号

発行者 平形義人

発行所 ぐんま日独協会

〒371 前橋市三俣町3-11-12

☎027-231-7212 FAX027-232-4082



・ぐんま日独協会クリスマスの集い

・平成8年12月8日

・群馬会館地下食堂

■ハイマート15号の主な内容■

- 記念大会へのお誘い..... 2
- 人物紹介・国際交流まつり..... 3
- 思い出に残るクリスマス・行事報告... 4・5
- 会員のお便り..... 6・7
- 会員消息・催しの案内..... 8

お知らせ

ぐんま日独協会第10回記念大会

- ・日時 '97.4.25(金) PM2時～5時 (一般入場無料)
- ・場所 高崎シティギャラリー (コアホール)
- ・費用 参加費1人千円及び平成8年度会費
(個人3千円 家族5百円 法人1口1万円)を
同封の振替用紙にて4月6日までに振込み下さい。
欠席の方は年会費のみ。
- ・当日は駐日ドイツ大使H.D.ディークマン博士の講演
普門義則先生 薩摩琵琶演奏・高崎第九合唱団コーラス
多数の皆さんの参加をお待ちしております。
- ・駐車場完備、8Pの案内・地図を参照。

題字：平形義人 表紙写真：石井 直人

ぐんま日独協会

第10回記念大会へどうぞ!!

会長 平形 義人

1988. 4. 17. 駐日ドイツ連邦共和国大使Dr.H.J.ハリヤー並びに御一家をお迎えして、清水群馬県知事の御臨席を得て、前橋商工会議所に於いて創立されたわがぐんま日独協会は、歴代の大使の御来県を仰ぎ、伝統ある(財)日独協会の御指導の下に、折よく同年結成された全国日独協会連合会に参加し、中曽根首相の肝いりのベルリン日独センターの初代甲斐総裁や、ベルリンの壁の話の小塩先生や、はじめに文化ありきの常木実先生や、日本の着物がドイツで大流行した話をされたJ.Kreiner博士等の講演会を催したり、時には日独懇親ゴルフ大会も催したりしましたが、常に日本国際医学協会石橋長英会長の「努力」「継続こそ力なり」の教えを忘れずに、ドイツ好きが集まって、ここに10年目を迎えました。

是れも^{もと}寔にボランティア活動と心得て不平一つなく活躍して下さった役員、50社の法人会員、150の個人会員の皆様の御協力のおかげと厚く感謝します。

来る4月25日(金)午後1:30開場にて、Dr.H.D.ディークマン駐日ドイツ大使夫妻をお迎えして、高崎シティギャラリー・コアホールにて、第10回記念大会を開き、大使の公開講演をお聴きします。大使はエリート外交官、イレーネ夫人はドイツ復興の盟主と仰がれるアテナウワー首相のお孫様です。御来会の皆様に御紹介出来ますことはこの上ない幸せです。引き続いて、NHKテレビ“花神”に登場された薩摩琵琶の名手普門院義則先生及び高崎第九合唱団に御登場を願って、記念と感謝の催しを開きたいと存じます。入場無料、知友お誘い合わせてお出かけ下さい。

ぐんま日独協会は、ドイツと仲よくし、ドイツに学び、群馬に因むドイツの歴史を大切に、群馬を文化の恵豊かな地にしようと願うドイツ好きの集まりです。

以上

第10回記念大会に於て講演される
H.D.ディークマン駐日ドイツ大使より
年賀状をいただきました。



〈御案内〉 歓迎
Dr.Heinlich D.Dieckmann大使夫妻
ぐんま日独協会第10回記念大会

日時 平成9年4月25日(金)
場所 高崎シティギャラリー・コアホール
1:30 開場
2:00 開会
国歌
会長挨拶
特別講演
駐日ドイツ連邦共和国大使
ハインリヒ・D・ディークマン博士
記念品贈呈
来賓紹介
3:00 日独芸能公演
1. 正伝薩摩琵琶 普門院宗家
高崎芸術短大客員教授
普門義則先生
2. 高崎第九合唱団
4:00 記念撮影 大使御夫妻歓送
4:15 会員総会
・経過報告・事業計画
・会計報告・平成8年度決算
・平成9年度予算
4:45 閉会

高崎市高松町35番地 ☎0273・28・5050
※新築中の高崎市役所北隣区画で城址地下駐
車場よりエレベーターでホールに入れます。
(割引券は受付まで)

●本の紹介 6,500円(送料実費)

ベルリン日独協会会長

Dr. Haasch氏編

「独日協会史」

—1888年から1995年まで—
ご希望の方は(財)日独協会へ
〒102 東京都千代田区麹町5-1
NK真和ビル9F
TEL 03-3265-3411
FAX 03-3265-3420



〈御紹介〉



写真は左より、ドイツ日本研究所長に就任（1996. 10/1）されたFrau Prof. Dr. Irmela HIJIYA-KIRSCHNEREITベルリン自由大学教授とベルリン日独センター総裁になられた木村敬三（勲日独協会副会長。（元駐独大使）
J・日地谷キルシネライト先生は、1948. KORN TALで生れ。1971. 日本人画家 Shuji Hijiyaと結婚、1980. 教授資格を得、独、英、日語の著作多数。1992. Leibniz Preis. 受賞、1994. よりヨーロッパ日本学会の会長。
1997.2.28. 上智大学に於て「異国趣味からの訣別」ドイツにおける日本文学を受容（Abschied vom Exotismus—Zur Rezeption japanischer Literatur in Deutschland と題する来日初講演あり。勲日独協会主催。



カルチャー違うね

湖葉辺平多
（ベーター・コバベ）さん（67）
ドイツ宣教師

下仁田町在住 滞在13年

昭和34年に初めて来日し神戸、軽井沢、愛知県などで活動してきました。下仁田キリスト教会は、鍋川河畔の美しい場所にあります。

協力者にも恵まれ、ここで長く活動していただけるのはまさに神様のお導きと言えるでしょう。来日した当初は「外人」「外人」と呼ばれました。でも、この人たちは心が開かれていて、本当に感謝しています。日本での暮らしは30年になります。数年前に妻とドイツに帰った時は、自分たちが「外人」であるような印象を受けました。すっかり日本に慣れたようでも、いまだに理解に苦しむこともあります。日本人は、自分のためにお金を使うという考えが少し足りないと思います。例えば外国に旅行に行った時など、お土産のことがばかり考えている人がいるでしょう。心の豊かさというものが少し欠けているような気もします。宗教観の問題とか、生と死の問題について日ごろから考えている人は少ないでしょう。あと、結婚式やお葬式の「お返し」の習慣もおかしいと思います。みんな、見返りを期待して行くわけではないと思うのですが。食べ物、大概のものは大丈夫になりましたが、納豆だけはまだ苦手ですね。

平成9年3月の群馬広報より

先生は春から7月まで故郷ドイツへ群馬の紹介、ご息子の結婚式の為お帰りになられます。

第9回全国

スポーツ・レクリエーション祭

—スポレクぐんま'96—

主催：文部省・勲日本体育教会・勲日本レクリエーション協会・田全国体育指導委員連合

昨年11月2日より5日にわたり坂東橋下流利根川河岸の所謂国体道路に沿ったぐんまスポーツアリーナに於て「心と体の健康作り」「ふれあいのある明るい社会づくりを目指した」スポレクぐんま大会が盛大に開かれ、11月3日県国際交流協会まつりが共催され、ぐんま日独も写真の様にブースを受け持って参加。数多くの国の方々やふだんお話の出来ない人々とワイワイたのしく一日をすごし、さわやかにつかれました。

前橋市 土屋喜代子



写真右より対馬副会長、佐藤副会長、土屋常任理事、久保理事子息、田所浪子会員

思い出に残る Xマスパーティ

高崎市 伊藤 廉 平

一九九六年十二月八日午後二時より四時半まで、ぐんま日独協会主催によるXマスパーティが昨年と同じ場所群馬会館の地下食堂で開かれました。

会場正面には日独両国旗が吊されその前に飾り付けの出来たXマストリーが見事でした。特に目を引いた大きなモミの木は平形会長のご好意でご自宅より運ばれた木でした。会の司会進行は角田副会長が引き受けて下さいました。



平形会長の挨拶、次いで来賓として前橋市長の代理として大谷輝治様が祝辞と乾杯のご発声をして頂きました。今年はXマスパーティのアトラクションの一つとして平形会長の仕舞と豊泉夫人の謡が披露されました。

日本古典芸術として歴史も古く、静寂でしかも無表情な動きの中に私達は知らず知らず幽玄の境地へと誘い込まれました。次いで讃美歌の合唱があり、会場には次第にXマスの雰囲気が増してまいりました。各テーブル別のスピーチや自己紹介もあり、クイズ合戦



仕舞 羽衣



等しあって初顔合わせの方も旧知の様な親しみを覚えました。

宴もたけなわの赤い帽子に赤い服、白いひげをつけたサンタのおじさん（仮装者は対馬、伊藤両理事）が大きな袋を肩にかけ会場を一周して、ささやかなプレゼントを致しました。次いで最大のおたのしみであるプレゼント交換会に入りました。

田口理事の呼び上げられる抽選番号と同番号の品物との引換えが行われました。果たして何が当たっているか、誰しも胸のときめきを感じる瞬間とと思います。

品物にはご自分のプレゼントより、はるかに上等の品物もあり、悦に入られた方もおりました。参加者全員へのお土産としてシクラメンの小鉢が中村副会長のご好意で贈られました。

しかし今回のXマスパーティで忘れられない事があります。須郷副会長の存在であります。

当日の会にも元気な姿で出席され余興ではドイツ歌曲「野バラ」を可憐な乙女の様な声で歌われました。そしてお客様の拍手を受けて、はにかみながらご着席になりました。その後姿がどこかさみしそうであったと一部の会員の方が申されました。

その日から一ヶ月もたった頃、その須郷さんが不帰の客となられました。過去の当協会主催のXマスには毎回出席され又協会の諸行事にも積極的に参加され活動して下さいました。本当に残念でたまりません。故人のご冥福をお祈り致したいと存じます。（表紙写真前列中央が須郷副会長）

本年も年末にはXマスパーティを開く予定であります。寒気きびしい季節ですので、会員およびご家族の皆様、健康には充分注意され再会の日には、笑顔で語り合える様にご自愛下さい。



行事報告

1996. 10. 2

花・ベルツ愛の日々

伊香保町 木暮 金太夫

昨年10月2日、ミュンヘン在住のノンフィクションライター眞寿美・シュミット・村木さんによって上記の題で伊香保で講演がおこなわれた。この講演会にはぐんま日独協会からも須郷、豊泉、土屋の各氏が出席され、参加者は総勢100人を超え盛会であった。花・ベルツは明治初期、日本政府の招きで来日し日本近代医学の発展に貢献したドイツ人医師、ベルツ博士の妻である。荒井はつ=花・ベルツ(1864~1937)江戸末期に神田で生まれ、明治、大正、昭和を日本と夫の国ドイツで生き異文化に触れ貴重な体験をした一女性である。この花・ベルツについてシュミット・村木さんは今回ドイツと日本で永年にわたって調査した結果について、特に伊香保温泉



97・10・2、伊香保公開講演のためドイツより関西空港・東海道・上越両新幹線を乗り継いで前夜ミット村木先生(伊香保金太夫ホテルにて)

との関係を中心として講演された。ベルツ博士は来日以来、温泉医学研究のため伊香保や草津など群馬の温泉を度々訪れている。しかもわが国で最初に系統的指導を受けたのが伊香保温泉であることもよく知られている。シュミット村木さんはドイツでは花の唯一の孫、トーマ夫人を通じて花の人間愛、家族愛について述べられた。また今回わが国で開催された花・ベルツ展に出品された花のドレスについての話は興味深いものであった。花・ベルツには「欧州大戦当時之獨逸」という唯一の著書があり、そのほか朝日新聞社から出版された「話のあるばむ」という本にも花のベルツに嫁ぎし頃なる一文が載っている。これ等を引用してシュミット村木さんは伊香保との関係に言及した。前記花の著書にはベルツがありし日の思い出の項があり、伊香保旅行、と越後の子供と伊香保出合祭がある。村木さんはこの伊香保の出合祭について話された。またベルツと花の結婚は「ベルツに嫁ぎし頃」なる一文からも明治14年と推定され、その年には伊香保に別荘を建っている。この事からベルツ夫妻の新婚旅行の地は伊香保であるとシュミット村木さんは自信をもって話された。花ベルツにとって愛の日々を過ごした伊香保は生涯忘れることのできない土地となったのである。伊香保は内陸にありながら明治時代から外国人の来湯が多く、国際交流の窓口的役割を果たしている。今後はこのような歴史的事実を活かして伊香保の発展につなげてほしいとシュミット村木さんは話を結んだ。

1996. 11. 30(土)

駒形駅下車、共愛学園女子短大にてハイデルベルグ大学教授Wolfgang Seifertの講演会が催され、54名出席。盛会。当協会からも有志出席。1995年9.30の高崎労働会館の講演を思い出し親しさ倍増の思いであった。共愛鈴木沙雄教授の講師との長い友情に感動する。

ドイツに於ける若者の日本学研究も古典のみならず、現代文学に及び、幅広いものとなりつつあり、日独文化交流の日常的広がりを感じられた。(Y.H.)

ぐんま日独協会に訪れて下さった方々の なつかしい写真紹介です。



① 赤城クローネンベルグドイツ村でハース大使とマイスターハースが、ハース対談(1994, 4, 16)



② ライマン先生が何やら唄っています。(1992,夏) さてその曲名を当てて下さい。当選者全員に粗品を差し上げます?(北爪 和男)



③ 室内楽団 Altusriedes Hausmusik の皆さんを日光へご案内。



④ 高崎少林山でホームステイのドイツ大学生が高寺教授の案内で観音山を見学(1993,秋)

会員からのお便り

初めてのドイツ・ オーストリア記

浜川市 高橋 徳光

昨年7月28日～8月5日、浜川の桜井病院院長の芳樹夫妻の誘いに乗り、JTBのドイツ～オーストリア旅行（フランクフルト・ハイデルベルク：2泊→ローテンブルク：1泊 ミュンヘン：2泊→ウィーン：2泊）に参加した。急なことで何の準備も出来ず不安だったが、凡てドイツ語圏なので「マア、どうにかなるだろう」と安易な気持ちで出発した。普通のカメラは持たずに、出発の前日に小型ビデオカメラを買って携帯したが仲々使えなれずに散々なフィルムになってしまった。処で一行は、鹿児島から群馬に跨がり、桜井夫妻、若い医師夫妻2組、年配者並びに若い高校の先生夫妻2組、国立ガンセンターに永く努めた核医学専門の小山田日吉丸先生夫妻とオバアチャン母娘連れ、それと単身参加の小生と計15名。大正生まれのオバアチャンが最も年配で、昭和一桁生まれは私を含めて3人。年の開きはあっても皆健康で「旅は道連れ」とはよく言ったもので意気投合して楽しい旅となった。

ネッカー川にかかるカールテオドル橋やハイデルベルク城、哲学者の道など散策し、小山田先生と一緒に昔を偲んで、…Heiderberg du meine Heimat…やLindenbaumなど口ずさんだ。今の若いドクターはドイツ語をあまり知らないのには驚いた。皆さんお酒を嗜み、よくビールをのんだのが旨かった。学生卒も見たが、普てのわが国の蜜から学生風もこの辺に発したのだろう。リンダーホフ城広場では、丁度兵役満了のキビキビした若者の姿が頼もしかった。ドイツ人は地味でチャラチャラした女性もおらず質実剛健の気風であるが、一度オーストリアに入ると、同じドイツ語圏の民族なのに、急に派手になり、男も柔(ヤワ)になってくる。ハプスブルグ家もかくして滅んだのかと思った。もう一度行ってみたいと思う。

グリュック・アウフの旅

館林市 対馬 良一

夜明け前の静かなゲルゼンキルヘンの街、突然大きな教会の鐘の音が響いてきた。

まだサマータイムなので外は暗い。ホテル、マルティムのベットの中でこの鐘の音で深い眠りから目を覚ました。同じ頃、15階の友人、高口氏夫妻もおなじようにこの鐘を聴いていた。彼はこの鐘の音の表現を次の様に記述している。晩前の静寂を裂く二つの教会からの鐘音の不協和音。38年前、ドイツ最初の夜明け前に「オーバーシュア」寮の寝床で聴いた天降るような鐘の音と同じだ。今1996年10月7日午前6時、その旧寮から歩いて5分足らずの公園の一角に聳える高層ホテルの15階のベットの中で当時と同じ二つの教会から昇天する鐘の音を聴く。と………文筆家らしい彼の表現である。

我々26名は10月6日成田を発ちベルギーのブルッセル空港経由で夜遅く懐かしのゲルゼンキルヘンの街に着いた。高口氏が不慣れな貸切りバスの運転手を達者なフランス語で昔の記憶を頼りに一発でホテルを探し当てた。鐘の音に起こされた我々は早々と濃いコーヒートパン、等の食事を済ませ懐かしの旧寮へ散歩に出かけた。当時からある排気立坑の槽も赤いレンガの堀も38年前と変わりがなかった。しかし当時の細い苗木が5メートルを越す大樹に成長し38年前の歳月の流れを感じる。いつも静かな住宅街に突然の日本人の来訪に驚いた多くのドイツの人々が家の窓から身を乗り出し興味深げに見つめていた。



写真はゲルゼンキルヘン市ホテルマルティムの前です。炭車と Gluck Aufが懐かしいです。

「私たちは38年前この地に住み、働き学んだ日本人で今回家族を連れて第二の故郷ドイツに来ました」と話しかけた。当時を知る人も多く懐かしい顔も見られた。正午よりドイツ版、謝恩会で当時お世話になった教育シタイガー、ハインケル氏夫妻や市関係者、市公文書館長、ルール大学教授、ボッホム鉱山博物館職員、ドイツ放送局、元炭鉱現場責任者の方々など45名以上出席し盛大なパーティとなった。私が司会を担当し高口氏が流暢なドイツ語で今回の訪問旅行の挨拶をし、壁に世界されたベリンオリンピック三段跳び優勝者田島直人氏をはじめ仲間の遺影を飾りそしてドイツ人同僚、知人等物故者に対し全員で黙祷をし冥福を祈る。帰国36年振りに会う人、夫を亡くし奥さんが写真をもってむかし夫が世話になった人と会う人、あちこちで抱き合うシーンが見られ涙と感動で会場はパニック状態となった。私も1年半、下宿していたボンペ一家を招待していたが大きな花束を持って来てくれた。妻とは二度目の再会でお互い抱き合い喜び合いました。会場の興奮が納まった頃、教育シタイガー、カール・ハインケル氏に挨拶をと頼む。「君達がドイツに来た当時は海外渡航など自由に出来ない時期であった。君達は非常に規律正しくいつも身なりもキチットしていた。私は若い日本人を担当した事を今でも誇りに思っている。」と挨拶された。対日感情もなく、極東の小国日本という小さな島国の若者をこれ程、愛し育んでくれたドイツはやはりヨーロッパの中でも大人の国であった。炭鉱という他の産業にない汗と炭塵にまみれた人々の連帯感であろうか？グリュックアウフ、グリュックアウフ、デアシタイガーコムトと歌いだす。ドイツ人もみんな大きな声で一緒に5番まで歌った。終わると突然ハインケル氏が「月が出た出た月が出た」と歌いだした。ドイツ人のほとんどが何の歌か判らない歌だったが日本人はみんな大きな声で歌った。最後のサノヨイヨイだけはハインケル氏が大声で締めくくった。ドイツ版謝恩会の終了のあと、私と高口氏がドイツ放送局のインタビューを受け長時間取材に応じていたがしがびれを切らしたボンペ夫人に家内と無理やりホテルから連れだされた。当日はボンペ家で夜遅くまで語り飲み再会を喜びあった。翌日は自由行動で、ライン河下り、家庭に招待される者など各自、自由に時間を費やした。その後ボッホム市にある炭鉱博物館の模擬坑に入坑し炭鉱の様子を家内達に見学させ炭鉱作業の厳しさを体験させたり、当時働いた炭鉱跡などを見学し、その後ケルンより夜行一等寝台列車でミラノ経由で水の都ベニス、芸術の町フィレンツェ、ピサの斜塔、ローマ、ナポリ、ボンベイの遺跡そして花の都パリなど12日間のグリュック・アウフツアーを終えた。あわただしい中にもこうして今回の旅の主目的は一応達成する事ができた。「このような記憶を辿る旅は単独でもできるが、若き日に喜怒哀楽を共にした仲間が熟年となり家族を連れて昔のシュプールを共に辿って感慨を分かち合うことに意義がある」と高口氏は語る。私も全く同感である。家族も今回の旅は忘れることの出来ない素晴らしい旅であり苦楽を共にしたドイツ人仲間と今も交流できる事に感謝している。

今回のグリュック・アウフ・オーバーシュア巡礼の旅の計画に対し、ディクマン駐日大使夫妻、元駐独木村大使、井上JTBヨーロッパ事業部長様、各位より心強いご支援を賜りましたことに対し紙面をお借り致しまして厚くお礼申し上げます。 グリュック・アウフ

ドイツ人のモラルの高さに敬服

富士見村 鈴木 克 彬

今般、前橋市の木暮澤子さんのご紹介で会員にさせていただいた鈴木です。妻の和子と共に入会させていただきましたので、今後ともよろしくお願い致します。

昨年（平成8年）9月6日から9月15日まで、私達は2人でドイツとオーストリアの鉄道旅行をして参りました。過去ヨーロッパには、ツアーの一員として2回程行ったことがあるのですが、私達2人だけの旅は今回が初めてでした。ドイツ語はダメ、英語はカタコトの私達にとって相当の冒険ではあったのですが、知り合いの方々とお会いする関係もあり、独自のスケジュールでドイツ訪問を行った次第です。結果は大成功、大変楽しい旅が出来ました。ここに宿泊地のみ書いてみます。

9/6	成田発	ルフトハンザ航空	
9/7	フランクフルト	1泊	
9/8,9	ミュンヘン	2泊	
9/10,11	インスブルック	2泊	
9/12	ザルツブルグ	1泊	
9/13,14	バートライヘンハル	2泊	
9/15	ミュンヘン発	ルフトハンザ航空	

◎旅行のねらい

私達2人は永らくフォークダンスを行っており、特にドイツ・オーストリーの踊り（ワルツ・レントラー等）が大好きです。その関係からドイツの方々とは知り合いが出来、今回はその人達の地域（バイエルンのフェスティバルの見学等）を訪問するのが目的でした。

◎ドイツにて感じたこと。

(A) 日本人に対し、根っから好意的。

空港、売店、乗物内等、すべてのところで日本人とわかると本当に親切にしてくれました。第2次世界大戦の同盟国ということか、東方の文明国という尊敬の念かわかりませんが、終始、親切な待遇を受けました。

(B) 鉄道。バス……切符はノーチェック
皆様方は既にご存知の方が多いと思いますが、国鉄（D B）、地下鉄（S B）、市電、トロリーバス等どれに乗っても改札口がありません。又駅員も車掌もいませんでした。すべてノーチェックで乗車・下車をしています。（切符を売る窓口や自動販売機はあります。）もし、日本なら多くの人が無賃乗車をしてしまうのではないかと思います、ドイツ人に「これでただ乗りする人はいませんか」と聞いてみました。その答えは、「そんな人はいませんよ。電車に乗るのであれば、払うのが当たり前で、もし、いやなら歩けばいいのです。」というものでした。私は黙ってしまいました。その通りと思ったからです。

(C) ごみ処理の先進地

私は現在、県の環境アドバイザーという仕事もさせていただいています。その関係から書物等でドイツの環境対策の先進的事例を学んでいました。それが今回、ドイツを訪問し、その基本が（1）決まったルールは守る。（2）合理的に物事を判断する。（3）モラルが高い。にあることが判りました。大変すばらしい勉強が出来たことをうれしく思っています。

◎フォークダンスについて

ドイツの踊りを私達が知っているのを見て現地の方々も大変喜んでくださり、仲間の一員として一緒に踊り、ジョッキを傾け、楽しい時をすごしました。

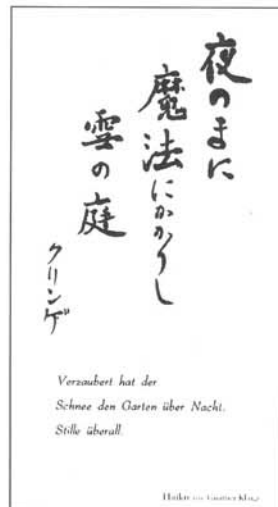
更に、ビデオカメラを持参したため、了解を得て、皆さん方の踊り・歌・その雰囲気等を撮影し、親交を一層深めることが出来ました。

ある年賀状

前橋市

佐藤 進 一

今年も亦ドイツ各地の友人知己からクリスマスカードを頂いた。ミュンヘン独日協会々長であるギュンター・クリンゲ（Gunther Klinge）さんは終身上院議員というえらい人であるが、俳句を能く



し既に立派な句集を出版している。膨大な部厚い句集を送付して頂いたこともあるが、内容は仲々素晴らしい。今回頂いたカードは日本人向きに賀状をかね、次の句が添えてあった。Verzaubert hat der Schnee den Garten über Nacht. Stille überall. 和訳として「夜のまに魔法にかかりし雪の庭 クリンゲ」とある。朝起きてみると前夜降り積もった雪が庭の景観を一変させた事を詠んだのであろうか、正に日本の感性である。外国の俳句季語より韻を重んじるものであるが、この句には hat と Nacht が韻を踏み、über が 2 度現れている。

この方は俳句だけでなく毛筆で和訳を見事に書き記しおまけに賀正の 2 字を添えてある。毛筆の日本語も立派な筆跡で、悪筆な私にとっては正に頂門の一針である。お返しと云っては失礼であるが、毛筆書きのカレンダーをお送りした所、署名入りの礼状を寄せられた。私と附合のあるドイツ人には盆栽にこっている人もいる。日本語を習っているクリステルさんはベルリンに住む女性薬剤師であるが、賀状を日本語のワープロで認めてくれた。昨年夏日本旅行に来て富士登山をした感激を記している。

ボンのアドラー教授は昔（戦前）東京大学に留学した事もあり、ボン大学で最近迄日本学を講義して来た。水彩画を能くし部屋一杯に作品を飾っているが、戦前の東京風景も伺える。今回のカードにはボンの日本大使館が日本庭園を寄附してくれたことを、ペン画の筆跡で画いている。

以上ご紹介したのはほんの一部であるが、タウトが昔高崎に滞在した時、Ich liebe die japanische Kultur.（私は日本文化を愛する）と述べた精神は、これらの人々にも受けつがれている。（終）

須郷 登世治翁に 捧げることば

高崎市 朝 雲 久児臣

このような表題の文章を、須郷さんにたいして書こうとは思ってもありませんでした。人の世の無情をこれほど痛感したことはありません。運命の過酷というのか、定めというのか、ただ哀切の思いに駆られながら「捧げることば」を綴ることにいたします。

一冊の本を大事そうに抱え、ぐんま日独協会の役員会に須郷さんが姿を見せたのは、平成二年、爽やかな初秋菊月。このときが初めての出会いでした。上梓したばかりの『ドイツ憲法の解説』を会に寄贈してくれました。即座に入会手続きを済ませた須郷さんは、年来の知友を得たように振る舞われのたは、ぐんま日独の雰囲気と、平形会長の人柄に深く傾倒し、同じ時代に生きた海軍士官の共鳴を覚って感動を抑えられなかったからでしょう。それから須郷さんは、翔けるが如く日独親善と、文化の交流に尽力されました。生来のダイナミックな活動は、私たちに驚嘆させたくらいです。ドイツ外相ゲンシャールの来日歓迎に上記の本を贈り、その返礼に大使館から贈られた『ドイツ写真集』に日本語訳をつけて私書版を制作、これを本会講演に訪れたハース大使に呈上しました。また、『分裂より統合まで1945～1990ドイツ写真集』に和訳を付して同大使に贈呈、その美しい色彩版はいたく大使の歓喜を誘った。選ばれて副会長になってからは、会長の「影の形」に添うように、あるいは、積極的な計画を提言したことは周囲の事実です。高崎市労使会館での「ザイフェルト教授講演会」、「ぐんま日独8周年記念大会および講演会」の同会館での開催にあたって果たした実践力は、須郷さんの真骨頂を顯示しました。

本年四月、高崎市シティギャラリー・コアホールにおけるドイツ大使H・D・ディークマン博士を招いての特別講演と総会の実施について、準備奮闘の最中における突然の死去は、須郷さんにとって如何ばかりの無念であったことでしょう。平成九年一月八日、享年七十六歳の生涯でした。

豪放磊落、苦学力行、篤学の人士であった須郷さんは、その晩節を国際憲法の比較論に傾注し、とりわけ日独の国際的文化を通じて平和の追求に道を求めました。「ぐんま日独協会」は、その展開の舞台になったように思います。平形会長の書面で知りましたが、須郷さんの「Die Zeit ist lang, aber das Leben ist Kurz」(時は長い、しかし人生は短い)という書物の末尾に記された箴言を、心に刻みながら、捧げることばを結びたいと思います。

【新会員募集中】

希望者は下記へご連絡下さい。
〒371 前橋市三俣町3-11-12
TEL 027-231-7212
FAX 027-232-4082

藤田眞之助先生を悼む

先生はぐんま日独協会4周年大会(1992)にW・ハース大使と共にご臨席され、知事や前橋市長を表敬訪問下された時の温顔は今も忘れることが出来ない。当時既に勲二等旭日重光章拝受され、東京通信病院名誉院長、(財)日独協会評議員、日本国際医学協会理事長を歴任、人格識見高潔、将来のぐんま日独の大先達と仰ぐべき人と期待されて居ましたのに、1996. 11. 1. 心不全のためご逝去、痛恨の至です。

先生が1984に著はされた『回顧七十年抄』に取められた「日独医学協定」(1939)に基き、翌年石橋長英日独医学協会会長を団長として「訪独医学使節団」が結成され、既に英独交戦中のため、シベリヤ経由で7月～10月にかけてシルクハットや燕尾服まで用意して出かけて大歓迎をうけ、講演、医学映画の上映を行い、大成果を挙げた詳細、真摯、正確なる記述は、団長秘書の先生の面目を現す歴史の文献である。

お知らせ

ぐんま日独協会第10回記念大会

◎記念講演〔一般入場無料〕

駐日ドイツ連邦共和国大使

H・D・ディークマン博士

◎日独芸能公演

★正伝薩摩琵琶専門院宗家(高崎芸術短大客員教授)
普門義則先生

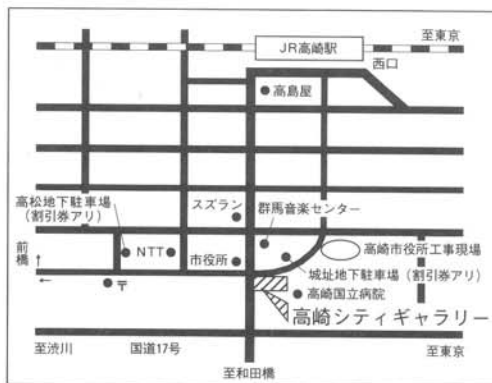
高崎第九合唱団

◎日 時▶4月25日(金) 午後2～5時

◎場 所▶高崎シティギャラリー・コアホール ☎0273-28-5050

〒370 高崎市高松町35-1

地下駐車場B5附近のエレベーターでホールに入れます。(割引券あり)



◇原稿ご案内◇

日独交流につながるご感想・情報・会員消息・作品を住所・氏名・職業・年齢・電話番号明記の上、お寄せ下さい。紙面の都合で編集部で手直しさせていただきます。 (800字以内)

◎原稿の返却は致しません。宛先は表紙参照。